

「玉野市立日比中学校生徒歌」

作詞:須和田 秀一
作曲:野上 義臣
制定:昭和 24 年

(歌詞の意味)

1 四海の涯(はて)に こだまして
自由の駒に またがりつ
正義にかざす 殿堂の
大戸が丘に(※) 我立てば
暁の鐘 轟きぬ

※ 大戸が丘 = 現在のミネルバのあるところ

世の中全体に見玉のように響きわたり
自由という名の子馬にまたがって(乗って)
正義を頭上に掲げる、立派な校舎のある
大戸ヶ丘に立ってみれば
希望が実現した鐘の音が 響きわたる

2 新緑燃ゆる 金ヶ谷
新の川の(※) せせらぎに
五月の花の うつろえば
高志を仰ぎ 健児らは
創業の夢 語り合う

※ 新の川 = 新川のこと

燃えるような新緑の金ヶ谷
新川の小さな流れに
五月の花が写って見えると
高いところざしを抱く意気盛んな若者は
実現したいことについて 語り合う

3 浦田が浜の(※1) 白砂の
飛沫に濡れて(※2) 映ゆるとき
松籟の音(※3)は 高鳴りて
眉すぐれたる 若人の
燃ゆる理想に 似たるかな

※1 浦田が浜 = 渋川海岸のこと

※2 飛沫 = 波のしぶきのこと

※3 松籟(しょうらい)の音 = 松の間を吹き抜ける風

渋川海岸の 白い砂が、波のしぶきに
濡れて美しく見えるとき、松の間を吹き
抜ける風の音が大ききこえるのは
きりっとした顔立ちの青年の
理想に燃えている姿に似ているだろう

4 ああ しょうじょうの(※1) 風吹けば
菊の香りも 清らけく
紅葉に映える 学舎に
若き血潮を 憩うとき
昇天の詩は(※2) 湧き出ずる

※1 しょうじょう = 寂しく、静かなさま様子

※2 昇天 = 天に昇ること、限りなくの意味

寂しく、静かに風が吹けば
菊の香りが清らかににおう
背後の紅葉の風景が美しい校舎に
若者達の意気盛んな情熱を思うとき
天にも昇るように 詩が湧いてくる

(歌詞の意味)

5 寒風梢を 吹き鳴らし

神登の峰の(※1) 月影に

古城の空を(※2) 偲ぶ(しのぶ)れば

先哲の気は(※3) 迫り来て

七百健児の(※4) 意気貴高し

※1 神登の峰 = 神登山の山並み

※2 古城 = 現在の向日比の港の手前に、
小高い丘があり、城があったと
思われている

※3 先哲 = 昔の優れた学者、優れた立派
な先輩達の意味もある

※4 七百健児 = 七百人の若者
(当時の生徒数)

冬の寒風が木の葉にあたり ざわざわと音
をたて、神登山の山並みにかかる月の光に
古城の跡の空を懐かしく思い出すと
立派な先輩達の意気を感じられ
700人の生徒の意気さらに盛んである